# 坂道

壺井栄作

岩波少年文庫 175

壺井 栄 作

坂　　道

岩波少年文庫 175　昭33

254P.　口絵1　さし絵34　18cm　小学上級以上

913

坂　　道　　岩波少年文庫 175

昭和33年9月10日　第1刷発行 ©
昭和45年8月20日　第12刷発行

¥ 280

作者　壺井栄

東京都千代田区一ツ橋 2—5—5
発行者　岩波雄二郎

長野市中御所 2—30
印刷者　田中忠

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2—5—5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　大日本法令印刷・三水舎製本

# 坂　　道

壺井 栄 作

岩波少年文庫 175

# もくじ

むかしの学校……五
あひる……一三
港の少女……二一
朝の歌……四一
小さなお百姓……五一
おみやげ……五九
小さな先生　大きな生徒……六七
あしたの風……八三
夕顔のことば……九三
あばらやの星……一〇九
妙貞さんの萩の花……一二三
ヤッチャン……一三九
十五夜の月……一五五

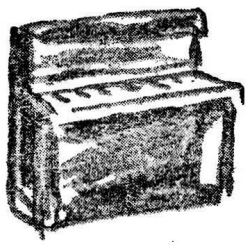


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

餓鬼の飯……一七七
あたたかい右の手……一九五
やなぎの糸……二一一
坂道……二三五
あとがき

口絵・さし絵　伊勢正義

# むかしの学校



みずうみのようにしずかなその入海を内海湾といいました。この内海湾をとりかこんで五つの村村がならんでいました。春江の村は湾の入口にあたるみさきのはしにありました。家かず六十戸、みんなお百姓や漁師ばかりです。学校は村はずれの丘のふもとにありました。三十何人かの生徒に先生がひとり。ですから教室もたった一つきりの小さな学校です。この教室で一年生から四年生までが四れつのつくえにならんで、ひとりの先生におそわるのです。村がせまいのでむかしから家もふえず、人もふえません。生徒たちは五年生になると村役場のある本村の学校へ、八キロの道をおべんとうを持ってかようのですが、それをどんなにかたのしみにして、四年のあいだをこの小さな学校でまなびつづけたことでしょう。唱歌や体操は一年生から四年生までいっしょでした。中里先

生はもう頭のまん中がはげている年とった先生ですが、小さなオルガンに合わせてたいそうよいお声でうたいました。先生のおしえてくださる唱歌は「もしもしかめ」だの「はなさかじじい」だの「まさかりかついだ金太郎」だのそういったおじいさんやおばあさんでも知っている歌ばかりでした。毎週水曜日に学校のオルガンがなりだしますと、学校のきんじょの家の人たちは中里先生の歌声にさそわれて、おとなも子どももいっしょになってうたいだします。のらに出ている人たちでもそのオルガンの音が聞こえてくるとついうたいださずにはいられないのです。

春江の家の畠は学校の運動場につづいたところにありますので、唱歌の時間に窓のそとへ目をやりますと、そこに草むしりをしたり、種まきをしたりしながら、しわがれた声をはりあげてうたっている、春江のおじいさんをよく見かけました。生徒たちはやんやとよろこびの声をあげました。中里先生がたまに新しい唱歌をおしえますと、おじいさんはおや、というふうにちょっと草むしりの手をやめて耳をかたむけたりしていますが、春江たちがおぼえたころにはおじいさんのほうでもちゃんとおぼえていっしょにうたっています。ラジオ体操がはじめられた時でも、春江のおじいさんはまっさきになってそれをならいました。

こんなふうに春江のおじいさんは、まるで万年生徒のようにこの小さな学校にしたしんでいるのです。おじいさんは毎日学校のそばをとおって畠へでました。畠は運動場のわきの小道をとおらねば行けませんから、おじいさんは生まれて六十年のあいだに、学校のすがたを見ない日とて

は、かぞえるほどしかなかったわけです。しかも村にこの学校ができたのは、おじいさんがはじめて一年生になった年のことだそうですから、おじいさんはとくべつに学校に心をひかれているのでしょう。くわをかついでほおかむりをしてのらへ出るおじいさんは、学校のわきをとおる時にはいつも笑顔になって、先生がおいでになってもならなくても、おじぎをしてとおりました。学校のそばに、小さな、しかしお百姓の家とはちがったげんかんのある家があり、そこがむかしからこの学校にこられた先生のお家ときめられていました。

春江の家ではおじいさんをはじめとして五十五歳のおばあさんも三十六歳のおとうさんも小さい時の四年間をこの学校でまなんだのです。学校は昔のままのかたちで、じゅんじゅんに村の子どもたちをそだて、そうして世の中へおくりだしました。おとなになり、年よりになるまで、村に残ってお百姓をしているものもあれば、よその土地へはたらきにでた人もいます。それからまた、ながい年月のあいだには戦争のためにいのちをすてた兵隊さんもたくさんありました。毎年毎年生徒たちの顔ぶれはすこしずつかわっていきましたが、いつがきても学校はおなじすがたで生徒たちをおくりむかえました。その間には先生もいくどかかわりました。その中でおじいさんやおばあさんの先生は森先生で、おとうさんのおそわった先生は草野先生だということを春江はよく知っていました。それはおじいさんやおとうさんが、おりにふれてはその先生がたのことを春江にきかしてくれたからです。おじいさんは森先生がおおじまんであり、おとうさんはまた

草野先生におそわったことを何よりもうれしげに話します。

おじいさんの森先生は漢文と書道がたっしゃで、おじいさんたちはとくべつにそれをおそわったということです。ですから、この森先生におそわった生徒たちは、春江のおじいさんのようなお百姓でもりっぱな字が書けるといって、おじいさんはじまんするのです。

森先生はたいそうお年よりで、ながいあごひげはりっぱなしらがだったということです。むかしのことで一まいの写真もありませんが、今日森先生のかたみとして村にのこっているのは、村の人たちのお墓の石碑の文字です。森先生のりっぱな文字は、丘の上の墓地のあちこちに、こけむしてのこっています。先生は病気のために学校をやめられ、故郷の高松におかえりになって、そこでまもなくなられたそうですが、ゆいごんによって分骨され、村の共同墓地にもそのお墓があります。「先生のお墓」とよばれて村中の人がおまつりしているのはこの森先生のお墓のことでした。春江のおじいさんは、今ではもうかぞえるほどしか残っていない先生の教え子たちとそうだんしてときどき森先生の御法事をしました。

それから、おとうさんのおせわになった草野先生は、この森先生から六人めに村へおいでになった方で、森先生とはたいに、これまでの先生の中ではいちばん年のわかい、いちばん元気な先生だったということです。草野先生のお家は、内海湾のむこう岸にある村にありました。春江の村からは入海をへだてていちばん近くに見える村ですが、歩いていくにはいちばん遠い村で



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

した。この草野先生は小さな伝馬船を持っていて、土曜日ごとにそれにのってむこう岸の先生のお家へ、米やみそをとりにかえりました。雨がふっても、風が吹いても、土曜日がくれば先生は伝馬船を海におろしました。この伝馬船は、ふだんは海べの松の木の下におかれていて、おろす時には生徒たちがみんなでてつだいました。土曜日の先生はとてもうれしそうなお顔で、「さよなら」と大きな声で帰っていかれました。なぎの日には船はみずうみのような波の上を、いつまでもろの音をたてて、すべるようにすすみました。風の強い日には、まるで木の葉のようにかるがるしくゆれました。なぎの時はいうまでもなく、雨の時も風の時も、生徒たちは海べにたって、先生の船がむこう岸につくまで見おくりました。そうして、月曜日の朝は、いつもよりはやく家をでて、海べにならんで先生の船をまちうけました。おきから、

「おうい」

と声がかかります。

「おうい」

「おうい」

「おうい」

男の子も女の子も声をそろえて両手をうちふりました。なぎの日はたのしいでむかえでしたが、むこう風の強い日など、船はもうそこに見えていても、なかなか岸へよりつけません。そればか

りでなく、高波に船のすがたがかくれることさえあるのです。先生はむこうはちまきで力んでいます。生徒たちはかたずをのんで海べに立ちつくしました。海べも波はあらく、生徒たちはみな、きもののすそをぬらしました。ようやくにして船が岸にちかづくと、先生は、ぱっととものなをなげます。生徒たちはひとり残らず一本のつなにとりついて、わっしょい、わっしょいかけ声をかけて船と先生とを陸へ引っぱりあげます。そうして船はまたつぎの土曜日まで松の木の下でやすまされるのです。

このお話をする時のおとうさんは、子どものむかしにかえったような顔で、

「あれはゆかいな先生だったよ。まるできょうだいのようだった」

といいます。今、春江たちの学校の運動場をぐるりととりかこんでいるウマメガシのいけがきは、この草野先生がのこして行かれたものだということです。

今は学校の運動場も半分はたがやされて畠になりました。それからまた、農繁期には生徒たちは、小さいながら人手のたりない家へてつだいに行きます。むぎかりどきにはおちぼをひろいに、いもほりどきにはいもの葉をむしりに。そうして学校ではニワトリやウサギをかって、当番でそのせわをしています。

「このごろの子どもはよくはたらくようになったものだ」

おじいさんは畠のゆきかえりに運動場のそばにたちどまっては、生徒たちをみてかんしんして

いました。

子どもたちはこのごろ学校でおぼえた畠づくりやニワトリかいなどのことを一生わすれはしないでしょう。ふるい小さな、学校のたてものもむかしからのできごとをなにもかも知っていて、だまって生徒たちを見まもっているようです。

# あひる

村では、とおい山の中からや、みさきの灯台などからかよってくる生徒のほかは、みなおべんとうなしで、おひるには家へたべにかえるのがならわしになっていました。おひるのかねがなると、学校の門は、おなかのすいた生徒たちを、いちどきにおくりだします。門のそとはすぐ道路で、その道にそって小さな川がながれていました。川かみの方へ走るものもあれば、川しもの方へかけだすものもあり、また門のすぐ前のはしをわたって、まっすぐにかえってゆくものもあります。だれひとりゆっくり歩くものなどありません。みんな一分でも早くかえってごはんをたべたいのです。

こうして生徒たちがかえったあと、しばらく、あたりはひっそりするのでした。するとまるでそれをあいずのように、川しものほうからあひるがひょこひょこ歩いてきました。川といっても、あ

まり水がないうえに、そのへんは流がきゅうなので、あひるたちはおよぐことができず、いつも水のないところを歩いていました。うすあかい水かきがやぶれはしないかと思うような石ころの上を、まっ白なからだをふりふり歩いているすがたは、とてもかわいいものです。

なぜ、あひるたちは生徒がさわぎながらかえったあと、すぐこうして、川しもの水のあるところから、わざわざ石ころ道を歩いてくるのでしょうか。しかもそのあひるたちは、学校の門のそばのはしの下までくると、そこから川かみへは行こうとしないで、なにかをまっているようにそのへんであそんでいました。

やがて、さっきごはんにかえった生徒たちがこんどはゆっくりと歩きながら、友だちどうしかたをくんだり、うれしそうに話しあいながらかえってきます。あやとりをしながら門をはいってゆくものもあれば、中にはおさつのふかしたのをたべながら、はしのそばまでくるものもあります。先生がごらんになったら、きっとおぎょうぎがわるいとおしかりになるでしょうが、よくみると、おさつを手に持っているのは、ふたりや三人ではありません。

だいたいこの村はおさつのよくとれる村なものですから、このごろのように代用食などといわれないむかしから、おさつを代用食にしていました。子どもたちが学校からかえるころをみはからって、どこの家でも、よくおさつをふかしました。そんな日には、子どもたちは、おさつをたべたべ学校へくるのでした。そして、学校の門のそばまでくると、さすがにたべながら門をはい

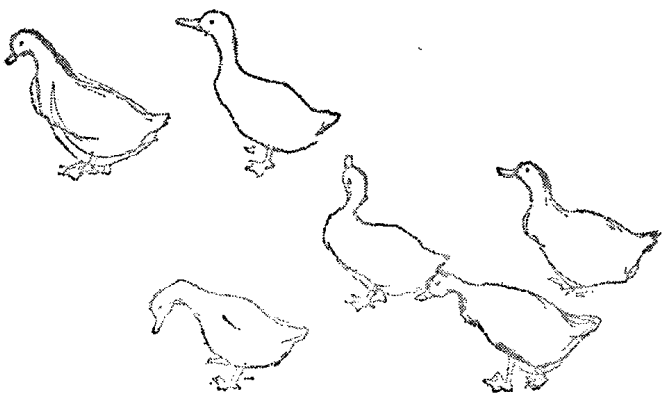
るわけにもいきませんから、たべ残ったおさつや、かわなどをこのはしの上から川の中へすててしまいます。それをよく知っていてまちうけているのが、白いあひるたちなのです。あひるはみんなで六羽いました。

となりどうしでなかよしのやす子とふじ子は、その日おそろいにおさつを持ってはしの上に立っていました。いつものように、おさつを小さくわってなげてやると、そのたびに、あひるは、ぐゎぐゎぐゎ、と、なきながらうばいあって、それをたべるのでした。ふたりがそうしてみんなあひるにおさつをわけてなげてやっていると、あとからきた同級生の秋男が、まるいおさつを、まるのままあひるのせなかへなげつけました。あひるはおどろいて、ぐゎぐゎぐゎ、となきながらはしの下へにげこみました。

「あら、秋男さんのいじわる、あひるが死ぬじゃないの」

やす子がおこるようにいうと、

「死んでもいいよ」





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo